

住人ではないけれど

どうとう、三十一年目になってしまった。

地下鉄の改札を抜け、階段をのぼりながら、私はため息をつく。

ためいきが三十一年目への思いなのか、この長すぎる階段のせいなのか、よくわからないが。

少なくとも、体力はずいぶん落ちてしまった。

好きだったテニスもやめ、特に体を使うこともない。

それにしても、人形町駅の階段は、何と長いことか。

上り終わったと思うと、また階段が現れる。

特別な運動をしなくても、毎日の通勤のおかげで、充分に私の足腰は鍛えられているにちがいない。

三十年目の時は、それなりに覚悟があった。

よくまあ、頑張って働いたものだ。

それも同じ会社に。

以前なら当然のことかもしれないが、三十年も同じ会社に勤務しているなんて、いまでは珍しがられる。

私があの子の娘だなんて、信じられない。

私の父は、長くても五年と同じ仕事についたことは

なかった。

終身雇用の時代の人なのに。

そんな夫のことを、近所の人や子どもたちには愚痴をこぼす母であったが、最後まで愛想をつかさとはなかった。

内職でどうにか家計を助け、母は子どもたちを育ててくれた。

母親が頑張るから、父親は呑気になり、もっとだらしなくなったとも言える。

しかし、もし、母親が自分だけ勝手に生きて、ひとり家を出たとしたら、後に残された子どもたちはどうなったことだろう。

そう思うと、私は母を責めることはできない。

ただ、大きくなるにつれ、自分の家庭が嫌になった。

「お前は、美術の方面でも才能あると思うんだがな。大学はだめだとしても、せめて、デザイン関係の学校でもいいから進学したらどうか。先生がお母さんに話をしてもいいぞ」

担任の先生の言葉は、私の大切な宝物だ。

そういえば、あの先生はどうしていらっしゃるのだろう。

先生の親身なアドバイスは嬉しかったが、独立したくて、私は就職の道を選んだ。

勤めて二年目には、貯めたお金でアパートを借りた。

ようやく、自分の世界が出来たのだ。

油絵も始めたし、大好きなテニスも同好会に入っ
て励んだ。

仕事は忙しかったが、嬉しくて楽しくてたまらな
かった。

今、考えると、本当に昔のことに思えてくる。

ここ数年入社してくる若い人たちは、あの当時、こ
の世に生れていないのだから。

あなたたちが生まれる前から、この駅の階段を上っ
て、通勤していたなんて。

会社の近くの喫茶店で昼ご飯を食べた。

食後に少しはゆっくりしたいとは思うが、次から
次へと客が来るから長居はできない。

コーヒーを飲み終わると、私はレジに向かった。

支払いが終わったはずの二人連れの女性が、私の前
に立ったまま、なかなか出て行かない。

「すぎのもりじんじゃってどこなのかしら」

「今日、べったら市だって聞いたものだから」

レジの女の子は、この町で働いてはいるものの、べつた
ら市も知らないらしい。

首をかしげたままで、答えない。

「すみません」とその女性たちなのか、私なのか、どちらに向かって言っているのかわからない無表情のまま、私の伝票を受け取るうとする。

後ろに人が並んでいるのに、女性たちはまだ、聞きたそうなさぶりだ。

「梶森神社なら、私、わかりますから」

支払いをすませた私はそう言って、彼女たちを店から押し出した。

「ありがとうございます」

レジの女の子の大きな声が、私たちを送り出した。自分に関係なくなると、現金な子だと思いつながら、私はおかしくなる。

神社の方角を説明したものの、結局、遠回りをし、おばさん二人連れを神社まで送る羽目になってしまった。

「まあ、ご親切に。ありがとうございます」

それで終わればよかったのに、最後にひとりが私に聞いた。

「ご近所の方なの？」

「いいえ、この近くの会社に勤めています」

「あら、なんだ、まあ、〇〇さんなの？」

なんだとは何だ、思わずそう言い返したかったが、ぐっところえて軽く会釈をして会社に向かった。

さんざんな昼休みだ。

近所の人に間違われるような格好なのだろうか、とビルのガラスに映る自分の姿にさっと目をやる。スカートではなかったからだろうか。

しかし、回りを見ても、パンツ姿の女性はいくらもいる。

その日は、仕事をしていても、澆刺とした気分にはなれなかった。

勤め人が、会社がある町を詳しく知っているわけではない。

あの女性たちには、そんな気持ちがあったのだろうか。

しかし、私はここに三十年も通っているのだ。

この町を知らないはずがない。

会社の人間だって、地域のお祭りには駆り出され、市の手伝いもしてきた。

「以前のべったら市は寒くてね。十月も末になると、あの頃はみんなオーバーを着ていたもんだ」
そんな話も聞かされた。

日本橋人形町は、料亭や老舗やうまいものの店ばかりと思われがちだが、オフィスも多い。

勤め人は昼ご飯を食べるに毎日出かけるから、店が開店しては消えていくのもずっと見てきた。

十年ももたない店がほとんどだ。

あの店、この店と、思い出してみれば、いろいろなことが浮かんでくる。

勤続三十一年のお祝いに、私はひとり茅ヶ崎にでかけた。

お祝いなんてものでもないのだが。

実は、新聞で見た椿園というものを、実際に目にしたくなったからだ。

もうひとつ、茅ヶ崎に足を向けても、もういいころだと自分で思ったからだ。

本当は、そちらの理由が大きいのかもしれぬ。

椿園は、今は茅ヶ崎市が管理しているが、もともとは個人の家だったらしい。

スマホを見ながら歩いて行くと、住宅街の中に、椿の生垣が続いている場所に出た。

門扉もなく、いつのまにか、庭に入っていた。

新聞で紹介してあった通り、椿は見ごろだ。

広い庭に、様々な種類の椿が咲き誇っている。

咲いたばかりの白い椿は、本当に美しい。

ボランティアの人たちが、落ちた椿の花を拾っている。

そのせいか、庭はどこも、今掃き清められたかのよう
うに清々しい。

香りの高い椿もあった。

見に来ている人は思ったよりも多い。

ただ、買い物をついでに、あるいは散歩のついでといった感じの人ばかりだ。

あの人と結婚して、この近くに住んでいたら、私もそうやってこの庭を見に来たのだろうか。

今となつては、もう想像もできない人生を、この庭で私は探してみたくなる。

二十九歳の時、テニスの同好会で彼と知り合った。

すぐくうまい、とほめてもらい、嬉しかった。

彼は私を指名して、ダブルスを組んでくれた。

同好会の合宿で、あちこち出かけたものだった。

茅ヶ崎に住んでいると、彼は教えてくれた。

しばらくして、おふくろに会ってくれないかと彼に言われた。

それが結婚の申し込みだとは、私は最初、気付かなかった。

嬉しきは次第にふくらんでいき、あの頃の私は本当に幸せだった。

仕事も、テニスも楽しく、彼は私を好きでいてくれる。

あの頃の私のような、花開いたばかりの椿を私は見て回った。

茅ヶ崎の駅で待ち合わせ、彼の家に行く約束はかなわなかった。

その前に、彼は突然死んでしまった。

テニス合宿に行く途中の事故だった。

二台の車で出かけ、私は後ろの車に乗っていた。

彼は最初、私と同じ車に乗っていたが、途中の休憩後、前の車に移った。

運転を交代してほしいと頼まれたのだ。

あの時、私も一緒に行けばよかった。

からかわれてもいいから、助手席にすわれればよかった。

カップルだと回りは思っていなかったから、恥ずかしく、勇気がなかったのだ。

スピードを出し過ぎた対向車が、急カーブを曲がり切れず、激突してきた。

助手席にいた知人も大けがをしたが、死んだのは彼ひとりだった。

私たちの結婚は、誰に知られることなく消えてしまった。

あのあと、しばらくはどんなふうに生きていたのか憶えていない。

情性のように仕事を続け、地下鉄の改札を通りすぎた。

駅の長い階段を上り、下った。

毎年、祭りがあり、市も立った。

弁当を持ってこなかった日は、昼休み、どこかの喫茶店や定食屋に行った。

そうやって、この町になじんだ。

住んでいる人と同じくらい、よく知っている。

いつのまにか。